



川口市末広の岡特殊溶接。岡網幸会長(76)は油と鉄で黒く汚れた作業服で仕事をしている。「鋳物の補修溶接は、鋳物の医者

の役割。鋳物工業を裏方として支えてきた。なくてはならない存在です」と胸を張る。昨年12月、川口商工会議所で開かれた「いいもの・いいわざブランド」の表彰式で、同社は優れた技術を持った6社のうち



20万キロ走った大型トラックの10気筒ディーゼルエンジンを前に岡網幸会長(川口市)

岡特殊溶接(川口)

鋳物産業支える仕事人

の二つだった。岡さんは息子の網保社長(47)と2人で表彰式に出席。「親子2人も現役。工場で溶接マスクをかぶっている」とコメントした。それから半世紀。川口市の本社のほか、栃木工場(那珂川町)、福島工場(白河市)、群馬工場(太田市)の4工場を展開。大手自動車工場などの常駐社員も含め従業員は36人。鉄、アルミ、ステンレスなどなんでも溶接する。経験と勘が大事な仕事。40

1957年に中学校を卒業。後に自社の役員になる同級生と2人で川口市へ。2人は別々だが、ともに同郷の先輩が経営する溶接工場に就職した。15歳だった。同社の商売繁盛の秘訣は愛情と信用。家族間だけでなく、従業員にも愛情を向ける。網保さん

溶接で補修する仕事だった。「この仕事が目白だった。独立しよう」と決意した。故郷の父・通網さんに話すと、「商売は人の信用だよ」と教えられた。たばこ、酒、ギャンブルはやらす、150万円を貯めて25歳で独立した。同時に与野市(現さいたま市)出身の美佐保さんと結婚した。

が上青木中学を卒業した日、学生服のポケットに「将来はお父さんの仕事を継ぐ」と書いた卒業文集の原稿を見つけた。読んだ妻と母が泣いた。その原稿は私の宝物。大事にしまっている。川口市末広1の27の7▽80 48・224・1362 (岸鉄夫)

岡網幸会長

鋳掛というのは溶けた鉄をかけて補修した時代の技術。いまは特殊溶接で補修する。直接教えないと、職人はついてこない。社員は何でも私に聞く。こうしたほうがいいよ、とか、ひとつひとつ教えてあげよう。